



すぐ目の前に漱石直筆の手紙。参加者は、食い入るように見ている

漱石の手紙は、写真では見たことがある。しかし肉筆を間近にすると、迫ってくるものが違う。文字の流れや濃淡か

夏目漱石ゆかりの地を巡るバスツアーで昨年11月16日、安芸太田町加計を訪れ、旧加計銀行(国登録有形文化財)で漱石の手紙などを見学した。案内していただいたのは、世話人の加計康晴さん(漱石の教え子だった22代正文のひ孫)。参加できなかった会員のみなさまに、当日の様子をお伝えする。(石田信夫「世話人」)

肉筆の手紙 伝わる息遣い

漱石ゆかり
加計ツアー

「漱石と広島」の会 会報

第21号



2025年(令和7年)
2月1日発行
「漱石と広島」の会



鎌倉時代から今までの家の歴史を話す加計さん

ら、あるいは行間から息遣いが伝わるようだ。参加者からも、ほうつという声が漏れた。
加計銀行を設立した正文が東京帝大の学生時代、英文学を講じたのが漱石である。教え子にあてた9通が、巻物仕立てで残されている。
冒頭部分の約5メートル分を、2回に分けて見せてもらった。正月の様子から筆を起こした最初の手紙は、4人目の女の子が生まれたことに触れ、結婚させる時を想像すると「ゾッとしますよ」と記す。思わぬ本音に苦笑してしまう。詳しくは2面を見ていただきたい。

明治の空気に浸った後は、歩いて「吉水園」に。江戸時代に16代の正任がしつらえた庭園である。もみじの盛りには早かったが、先端が真っ赤に色づき、緑と



吉水園内にたたずむ吉水亭。紅葉の風情は格別だった

紅葉の吉水園に三重古を想う

正文は、家業を継ぐために退学した。思い切った決断をしつつ、短い間ながら

のコントラストが美しい。
池に臨んで東屋の「吉水亭」がたたずむ。正文の親友だった鈴木三重吉はここにほぼ一週間逗留し、小説「山彦」の想を得たという。
扁額の一枚を見ると「敲月」とある。推敲という言葉の由来である「月下推敲」を約めている。中国の詩人が月夜、詩文の一字を「推す」にするか「敲く」にするか考え抜いた故事による。三重吉の胸にも響いただろう。
ボランティアガイドの栗栖一正さんから意外な話を聞いた。映画『もののけ姫』のシナリオ作りに、加計家の「隅屋鉄山絵巻」が参考にされたという。精細な作業風景が描かれていて、映画に生かされたようだ。
参加者は26人(一般19人)。予報ではぐずつき気味とされていたが、ほどよい天気。充実感を覚える秋の一日だった。

薫陶を受けた師への思いも断ち切れなかったようだ。声を「押しかけ録音」したエピソードが知られる。レコードは既に再生できなくなっているが、蓄音機は今も光沢を保っていた。
加計銀行は今の広島銀行の前身の一つで、室内には当時の雰囲気の色濃く残っている。例えば金庫。重厚なつくりで「明治二十九年竹内製」とある。加計さんの「つまみをよく見てください」との声で近寄ってみると、数字でなくイロハの片仮名だった。マニアックな趣味の人なら歓喜するかもしれない。